

ノディングズの平和教育理論の検討

— 大西鉄之祐のスポーツ理論を観点として —

伊 藤 博 美

はじめに

2016年、日本では終戦から71年目を迎え、学校の平和教育（学習）を支えてきた、戦争体験者による語りを聴く機会の減少により、別の平和教育（学習）の方法の模索が問題として顕在化している。同年、オリンピックは平和の祭典という近代オリンピックの提唱者クーベルタンの言葉が、リオ大会の開催を契機に散見された¹。当該大会の開催前後、日本では次の東京大会の諸々の問題もあり、オリンピックやスポーツは身近な話題となったが、平和学習とは一線を画している感がある。オリンピックやスポーツは、平和教育や平和学習、さらには平和構築にどれほど、どのような意義を有するのだろうか。

そこで本稿では、以下で我が国の戦後学校教育に影響を与えたデューイ（John Dewey 1859-1952）²の理論に依拠してスポーツの教育的意義を明らかにした先行研究を整理し、第一に、アメリカの中等学校における平和教育の方法を試験的に提示したノディングズ（Nel Noddings 1929-）の『平和教育（*Peace Education: How we come to love and hate war*）』（2012）からスポーツ等に関連した戦争に関する心理的側面と体育による平和教育への提言を整理する。第二に、デューイ理論に依拠してスポーツの教育的意義を唱えた大西鉄之祐（1916-1995）の諸概念を整理し、大西が師事した植田清次の『プラグマティズム』（1949）から補足する³。第三に、大西によって示された平和教育（学習）や平和構築の方法を観点としてノディングズの『平和教育』論を検討する。これらを通して、近年のデューイ研究における諸概念から大西の言説を再評価し、平和構築や平和学習への体育・スポーツの貢献のあり方を探る手がかりとしたい。

なお「体育・スポーツ」については次のように規定しておく。日本では2011年スポーツ基本法でスポーツが「国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠なもの」と規定され、1977年改訂学習指導要領以降、教科「体育」が「運動による教育」から「運動・スポーツそのものの教育」へ転換している（体育科の第三の波「楽し

い体育」の流れと言われる) なか、教科「体育」や運動部活動といった「学校体育・スポーツ」が重視されるようになった⁴。本稿では教科に着目する場合「体育」、それ以外の学校教育活動における「運動やスポーツ」を「スポーツ」とし、学校教育活動全体の「体育・スポーツ」はそれらを併せたものと捉える。

本論に入る前に、デューイ理論と体育・スポーツに関する先行研究を整理しておく。

2010年代に入ってから、体育・スポーツ系の学界においてデューイは繰り返し取り上げられている。森田(2010)はデューイの「経験」概念が戦後の新体育(生活体育)の基盤であることを指摘し、学校体育論へのデューイ理論の示唆を明らかにしようとしている。また、高橋(2011a; 2011b; 2015)は、デューイの「経験」概念から、スポーツの経験の連続的再構成には成長過程が内在し、この成長過程が教育過程であることから、スポーツをする人間の教育可能性を見出している。さらに神野(2014)は、学校教育における教科体育の運動能力・体力・技術の向上という「狭隘な功利性からの解放」を求め、「永続的な文化豊饒化と人格可能性の豊富化」(p.42)をデューイの学校教育論から引き出している。そうして、体育における精神的探求による自己の内面的な再創造と、身体の再構成という自己創造の過程に着目し、体育を「児童や生徒一人ひとりの成長に対する、身体運動、あるいは身体運動文化を媒介とした寄与である」(神野, 2015a, p.84)とする。加えて高橋と同様、学校体育における身体的成長だけでなく内面的世界の「更新」「改造」「自己創造」という成長を重視している(神野, 2015b, p.41)。これらの研究はいずれも体育・スポーツによる人間の成長を、デューイ理論に依拠して明らかにしている。

1. ノディングズの『平和教育』

ノディングズは、アメリカの教育哲学者である。女性の経験に着目し著した『ケアリング』(1984)で着目を浴び、その後も精力的に研究活動が続けている。『学校におけるケアの挑戦』(2007=1992)ではケアを中心としたカリキュラムや教授法を提案し、『批判的課業(Critical Lessons)』(2006)では、批判的思考力育成のための中等教育における具体的な教材が提示されている。ここで1章を割いた戦争の心理について詳しく展開されたのが、『平和教育』(2012)である。本書の章構成は次の通りである。第1章 歴史における戦争の中心性／第2章 破壊(destruction)／第3章 男性性と軍人／第4章 愛国主義(patriotism)／第5章 憎しみ／第6章 宗教／第7章 平和主義(pacifism)／第8章 女性達と戦争／第9章 実存的意味／第10章 教育への挑戦である。本稿ではスポーツや体育に関連する、第3章・第4章・第9章・第10章の各章に焦点をあてることとする。

第3章では、「男性性と軍人」というタイトルで、軍人達が訓練(training)や厳しい訓練の合間にお互いが知っている歌を歌うことなどを通して、仲間意識(comradeship),

互いへの友情や親愛の情 (affection) を醸成させていくことが、戦争の魅力の一つであるとして紹介されている。他方で、文民達にとっては、そうした仲間意識の魅力を描いた物語を喜んで読み、いずれもが戦争を支持する心理だとされている。

第4章は「愛国主義」と題され、スポーツに関しては戦争を支持する心理的作用をもつものとして危惧されている。とりわけ、スポーツの観戦者は党派心 (partisanship) をもち、ひどく興奮して叫んだりシュプレヒコールをあげたりする。リオでもそういった場面が見られたかも知れないが、ノディングズはヌスバウム (Martha C. Nussbaum) (1996) を参照し、例えば "U-S-A! U-S-A!" とシュプレヒコールをあげる観衆の興奮した心理の状態を紹介している。

第9章は、逆説的に書かれた章だと言える。ノディングズは、人々が毎日の暮らし (everyday life) を退屈に感じてしまい、宗教、愛国主義、また個人的な何かより大きな集団に参加したいという思いにより、戦争を支持する心理へと駆り立てられること、しばしば人々の人生における意味の源の一つとなってきたこと (a source of meaning in human lives) を提示している。とりわけ、例えばあるサッカー・チームへの狂信 (fanatism) や熱狂 (enthusiasm)、これらは戦争のときには国家全体への思いに吹き飛ばされてしまうのだが、それらが思慮無く強く影響 (あるいは感染) して、暴走したり他人に暴力をふるったりしてしまう結果に、警鐘を鳴らしている。

こうした戦争を支持する心理を踏まえ、ノディングズは中等学校の平和教育において次のような挑戦を体育 (physical education) 教師に提案する。

例えば音楽と体育の教師が共に、行進曲が皆をシンクロさせる威力について、生徒が理解する助けとなる授業をしてはどうか。また、第9章であげたような狂信や熱狂に関連して、競争的なスポーツでの自分の反応 (response) の理解や制御と、交戦状態 (warfare) における闘争心 (fighting spirit) との結びつきについて自由に議論させてはどうか。例えば、ウェリントン卿がナポレオン時代のフランス軍と戦い勝利したことを、イートン校でのラグビーに興じた経験と関連させて語ったことなどを題材にしてはどうか。

ノディングズは、体育が知的な側面を見落としている点を批判している。体育が教育の不可欠な部分であることは、ギリシャの健全な精神と健全な肉体の相互依存という例からも、教師達に議論されるべきと主張している。

2. 大西鉄之祐のデューイ理解

ここでは、大西鉄 (鐵) 之祐 (TBS 系ドラマ「スクールウォーズ」(1984-85 放映) の日本代表監督のモデルとしても著名) の言説を、デューイ理解を観点として整理する。

まず大西について紹介しておく。大西は自身の戦争体験について次のように書いている。

〔昭和：引用者註〕十四年大学卒業と同時に兵隊検査、合格、十五年一月現役兵として近衛歩兵第四連隊に入隊させられてしまった。それ以来現役兵二年、幹部候補生になり陸軍少尉任官、直ちに招集、仏印、タイ、ビルマを経てマレー、シンガポール作戦に参加、続いてスマトラ作戦に参加し占領後スマトラ守備旅団に敗戦撤退まで、二等兵から大尉までの七年間を軍務に服していた。その間の軍隊生活および戦争体験は私の人生に大変革をあたえたと言っていいだろう。それは大学以前ののんびりとした生活や教育とは違って死を眼前にした直接経験そのものであった。(大西ほか、1987, pp.14-15)

私達のやってきた戦闘という行動は、後から考えてみると、瞬間的な気違い沙汰だと言うことができるだろう。(中略) 闘争の倫理ということを私が最近言っているのは、こうした局面をつくる前の段階で人間は何か自分をコントロールしておかないと駄目なのではないかということなのである。実際戦争に直面すると人間の理性などといわれているものは、何の歯止めにもならない。戦闘をやって自分の戦友が殺されたりすると、その戦闘が終わって敵の捕虜などを捕らえると、まるで物を扱うように殺してしまう。(同 p.17)

こうした体験を踏まえ、大西は戦後、教職に就こうとしたが、教員免許がないため早稲田大学に勤めることになった。その後、植田清次（早稲田大学教授で『思考の方法』『確実性の探究』訳者）に師事してデューイ理論を学び、他方でラグビーを通じたパブリック・スクールの教育についても学んでいる⁵。そうして早稲田大学のラグビー部監督、日本代表の監督を歴任している。

大西は、他の著作者からのインタビューも含む『闘争の倫理』（1987）で、デューイ理論を次の点から支持している。行為において理論を実証する過程（p.31）、他者との協力による成長（p.77）、人間と環境の相互作用による意味の生成（p.77）、科学における実験と反省・吟味による理論の再組織化という繰り返しの過程と、その過程の、スポーツを含む人間の行動への適応（pp.180-181）、行動によって経験の材料を意志的に再組織する知性の働き（p.201）、一つの教条に基づくのではなく多様な人間が選択してよりよい社会を作り上げて行こうとする創造的な行動の考え方（p.205）、過去・現在・行動の関連性をもって相互作用し前進するという経験論（p.255）である。

（1）科学的方法・知性・探究（求）

ここでは、スポーツと平和に着眼して、大西によるデューイの諸概念理解を整理している。まずは、科学的方法や知性、探究（大西は「探求」とする）についてである。

大西は、スポーツについて教えるべき三つの機能があるとする。第一にスポーツの動機

ともなる、遊びとして楽しむという自己目的性や自由性を含んだ遊戯性、第二に競技的性質のスポーツに顕著な、人間の生存には原初的である競争性を含んだ闘争性（この原初的な闘争性を、倫理の「植え付け」によって平和的なものにコントロールすることを、大西は「闘争の倫理」と呼んでいる）、第三に、努力することを楽しむまでに心も技術も向上させる進歩を含んだ技術性である。

第三の技術性に関連して、大西はスポーツにおいても知性が教えられるべきと主張する。競技性のあるスポーツにおいて、勝敗にこだわれば、勝つためという目的を立て、技術を研究して練習し、さらに反省して改造し練習を繰り返す。これは、困難な状況に向き合ったとき、勝利を目的に掲げ、それまでの経験の材料を再組織化し理論づけ、それを繰り返し反省吟味しながら練習（行動）することで、勝利を獲得して困難な状況を克服するという、知性的で創造的行動であり、人間の行動（ここではスポーツ）に、科学的方法すなわち探究（求）の方法を応用させるものである⁶（ただしここでは、単なる勝利至上主義ではなく、〇〇に勝つといった現実的・具体的なものであることに留意しておきたい⁷）。

『闘争の倫理』では、科学的方法を、情報収集して理論を構成し、繰り返し実験する中で反省・吟味し、理論を再組織化する過程と換言している。人間による科学の進歩は、こうした知性的で合理的かつ創造的な行動によって推進されてきたと大西は理解し、この行動主義的な思想こそが体育やスポーツにおいて重要だと述べている⁸。

それゆえ実際、『わがラグビー挑戦の半世紀』（1984）において、大西は、自らの研究の第一歩、言い換えれば新しいラグビー創造の道を、デューイの知性的行動の理論を基盤とした知性的ラグビーの確立への挑戦であるとし、自らの実験（実践）として、ラグビーでの科学的方法を次のように説明している。知性的ラグビーの確立には、理論・戦法・技術・練習の相互作用が規定されねばならず、理論の構成と実験、実験による理論の修正の繰り返しにより、ラグビーを進歩（大西は「前進」という）させるという挑戦が果たされねばならない。そこではラグビーのゲームにおいて理論と行動の一致が見られることが必要である⁹。

そこから4年後、大西は『ラグビー 荒ぶる魂』（1988）でラグビーにとどまらず、スポーツの魅力はゲームの勝敗の不確実性にあり、その不確実性から、プレイヤーは勝利を目指して知性を導入し、探究（求）を始めると述べている。そうしてこの勝利をめざし知性を導入した科学的研究について、次のように説明する。現代では、同一の技術・体力を備えた競技者と、対等な地域・空間・競技者数・使用器具といった条件に加え、ゲームの経験や規則の国際的整備から、合理的攻防の理論が確立される。それを実際のチームやプレイヤーに適用して諸々の具体的戦法を選択することが、開発と見なされる¹⁰。

以上のように、情報を収集して理論を構成し、繰り返し実験する中で反省・吟味し、理論を再組織化する過程であるデューイの科学的方法を、大西はスポーツにおいて、具体的な条件の下で合理的攻防の理論を確立し、実際のチームやプレイヤーへ適用した実験の中

で反省・吟味することで、戦法を吟味し選択する過程へと捉え直している。

(2) 闘争の倫理

平和に関して、大西がスポーツを通して「闘争の倫理」の涵養を訴えている点を整理しよう。大西は次のように断言する。

スポーツというもののだけが今教育の中で残されている闘争の倫理を作り上げる唯一のものだ。(大西ほか, 1987, p.93)

われわれがスポーツをやり剣道をやり、試合をやるのは何なのかというと、その中で闘争というものをどうコントロールするのかということを身につける為に行っているんだと。(同, p.286)

スポーツを通じての集団のなかで、皆がどうやったらいちばん愉快地に、しかも平和な社会が作り上げられるか。スポーツをその人間が行うことによって社会に影響を与えるだけではなく、そのスポーツを通じてクラブ生活つまり社会生活を行う。そのクラブのなかに共通のフェアという精神があって、その精神を身につけた者が今度は本当の現実の社会に出て、現実の社会でフェアに行動することによってスポーツはその集団の生活を通じて社会にいい影響を与えていく。(同, p.157)

こうした考えは、『闘争の倫理』において初めて現れたわけではない。上述の『わがラグビー挑戦の半世紀』において、次のように述べられている。人間の行動としてのスポーツのゲームにおいて、最も重要なのはチームワークである。ゲームでは、上述した知性的ラグビーに見られる理論と行動が一致した合理的行動が存在するが、他方で、非合理的・情緒的な行動も存在する。いずれの行動にも各プレイヤーのコントロールが求められるが、特に後者に対するコントロールを、大西は「修行」によってなしとげられるとし、そこにラグビーの教育的価値があるとする¹¹。

『闘争の倫理』において、大西は自らの「修行」を、念じたり悟りを開いたりするような宗教のものと区別して用いている。大西から見れば、現代において宗教は無力である。各人は愛し、讃え、執すること(スポーツ、音楽、芸術、学問など)をおこなうなかで、「行」^{ぎょう}を積む¹²。『闘争の倫理』によれば、スポーツを、当初は遊びとして楽しむ、自己目的的な動機から始めるが、最後にはそのスポーツをスポーツとしてルールに基づきながら、究極的に勝利を求める知性的あるいは創造的行動、言い換えれば探究(求)のなかで「行に」至ると考えられる。

さらに『ラグビー 荒ぶる魂』では、闘争における恐怖心の克服、勝ちたいあまり汚い

(アンフェアな) プレイに走ろうとする誘惑の克服、自らを客観化できない経験を繰り返してコントロールできるようにするという情緒的な行動への平和的なコントロールを、「修行の過程」だとしている¹³。

ちなみに大西は、本能と衝動が社会の中で人間が環境と相互作用することにより、慣習的行動を身につけ、社会生活を送れるようになると『闘争の倫理』で考えている¹⁴。したがって、闘争の倫理は、スポーツを行うなかで、他のプレイヤー（あるいは相手チームのプレイヤー）との相互作用により、習性として身につけられ、さらに指導者やマネージャーらといったクラブの仲間との相互作用から身につけられていくと捉えられている。そうして身につけた闘争の倫理をスポーツといういわば非現実的な場から、現実の社会に適用されることが期待されている。

ところで、スポーツを科学だけでなく道徳・美を含む人間の行動と捉える大西はデューイを越えていると、藤島（2001）は見ている。しかし、デューイの社会進歩の概念を、いろいろな人間が社会においてグループを成し、いい社会を目標に協力することによって達成すると捉えている大西は、デューイを越えているといえるだろうか。むしろ、大西の社会進歩の概念は、多様な人びとが一緒になってよりよい社会を作り上げていこうとする、デューイの民主主義概念を捉えている。それゆえ「闘争の倫理」が、環境や他のプレイヤーとの相互作用の中で身につけられると考えられている¹⁵。

3. 考察

ここまで、ノディングズの『平和教育』におけるスポーツや体育を通しての平和教育と、大西の『闘争の倫理』を中心としたデューイ理解と「闘争の倫理」について整理してきた。

(1) 大西のデューイ理解に対する疑問

まずここで生じてくるのは、大西のデューイ理解への疑問である。上述したように、大西は、スポーツでの闘争においては、勝利を求める知性的・創造的行動すなわち探究のなかで「行」に至り、情緒的・非合理的な（恐怖、誘惑、混乱に基づく）行動をコントロールすることをプレイヤーが体得していくと考えている。また、本能や衝動は環境や他者との相互作用のなかで慣習的行動を身につけることでコントロールされていくと考えられている。それでは、情緒的・非合理的な行動、本能や衝動に基づく行動は、デューイ理論において知性的・創造的行動または探究に劣る、コントロールされるべき未熟な行動と捉えられているのだろうか。

この疑問を解消するため、大西がデューイについて師事した植田（1949）に補足的な説明を求めたい。

この衝動は、それ自体としては存在することができない。それは行動のなかに始めて自己の地位を見いだすと云う。行動なしに衝動はない。時間的には衝動は行動に先行することは否定せられないが、事実において衝動は行動に依存し、行動によって衝動は認知せられる。この点をデューイは大人と嬰兒の比較によって説明する。嬰兒の衝動は、大人の行動もしくは習性的衝動によって扶助せられるのでなかったら、何の意味も持つには至らない。大人の力によって嬰兒の衝動は行動としての資格に進められる。かくの如き衝動は人間以外の動物の本能とは異なるのである。本能は生具的であり、それ自体としての行動をもつが、人間の衝動は、それ自体としては成立せず、行動の一要素として、行動を地盤として存在するとデューイは解する。衝動は人間が出生後に得たものであり、その生涯を通じて、経験の発展過程につねに介在し、人間の行動の根原的な推進力となる。この衝動によって行動が改造せられ、習性の新しい方向が自覚せられ、やがて習性の特質が変容せられる。……いずれにしても行動のうちに含まれて、行動を改整する原動力として在る衝動の地位は、一面拘束せられて一定の型に嵌めこまれた習性から区別せられ、他面独立独歩の境涯にも属さないのである。すなわち衝動は自由不羈な行動ではない。ただ習性によって新鮮かつ快適と認められた場合にかぎって、衝動は自由な力として活動し得ると解される。この衝動は、個人的習性に対すると同じ地位を、社会的習性の中に占め、歴史に参与し、歴史を方向づけ、歴史を転換する動因となる。かくして習性と衝動とは相互に補足して人間生活を推進する。(植田, 1949, pp.252-253)

このように、植田のデューイ理解においては、衝動は行動の一要素であり、行動を地盤として存在する。また、人間の行動の根源的な推進力であり、行動を改整する原動力であり、習性を改めさせていくものである。したがって、衝動に基づく行動はコントロールされるべきものではなく、むしろ一定の型にはまった習性から見て新鮮かつ快適と認められる場合には、新たな習性の方向性を示すものである。

こうした植田のデューイ理解に従って、情緒的な行動や衝動に基づく行動はコントロールされるべきかという大西に対する疑問を再検討しよう。大西は、あるスポーツの部分的な練習ではなく、早期からゲームをすることで、汚いプレイへの誘惑を克服する、というよりも、誘惑をもたないようにする方法を提唱している¹⁶。すなわち、フェアとアンフェアを判断するためには、知識として教えるのではなく、行動するなかで判断する能力を習性として身につけていくというのが大西の考え方である。汚いプレイでも勝ちたいという誘惑の克服は、子ども(植田の言葉では嬰兒)時代から考えられねばならない。子どもであっても、まず「勝ちたい」という衝動が、プレイという行動よりも時間的に先行する。しかし勝ちたいという衝動は行動(プレイ)の推進力にはなるものの、大人の行動または習性的衝動(いわば闘争の倫理に基づくきれいなプレイで勝ちたいという衝動)によって

扶助されてはじめて行動に移される（でなければ子どもはどういう行動が勝ちをもたらすかも分からないだろう）。したがって、大人のもとでフェアなプレイを喜ぶ経験を繰り返すなかで、フェアとアンフェアを判断しフェアなプレイを実践する社会的習性を身につける。

ここでは、勝ちたいという衝動が、フェアなプレイを実践する社会的習性を身につける原動力になっている。したがって、衝動に基づく行動は必ずしもコントロールされるべきものでない。「習性と衝動とは相互に補足して人間生活を推進する」という植田のデュイー理解に従えば、習性に認められない衝動からくる行動はコントロールされるべきであり、きれいなプレイで勝ちたいという習性的衝動からくる行動は習性をよりよいものへ変容させる原動力となるということである。

なお、汚いプレイでも勝ちたいというのは十代以降に芽生える誘惑であるというのが大西の見解である。それでは、日本でいうと高校生世代からラグビーをプレイするようになった子どもは、フェアかアンフェアかを判断する習性を身につけられないということにならないだろうか。そこで大西は、フェアやルールを先天的に絶対的に授けられたものではなく、やはり探究（求）の対象として考えている。自らのプレイをフェアかアンフェアか、自分達の遵守しているルールが妥当か否か、これも「次の真理」に向けて探究（求）するものと考えている¹⁷。

大西のデュイー理解を植田によって補うことで次のように総括できよう。「闘争の倫理」は、ゲームという相互作用のなかで、経験を累積させ修行する中で情緒的な行動のコントロールを体得するものである。同時に、他のプレイヤーや他のチームとの相互作用およびラグビーというゲームの理論から自らのプレイを省み、きれいなプレイで勝ちたいという衝動に動かされ、フェアかそうでないかを判断する習性に支えられ、よりフェアできれいなプレイを求める、科学的探究（求）という知性的行動の過程でもあると言えよう。

（2）ノディングズの『平和教育』に対する疑問

大西の「闘争の倫理」から観れば、ノディングズの『平和教育』についても疑問が生じないわけではない。ノディングズが体育（PE）教師に求めることは、行進曲が皆をシンクロさせる力を、生徒が議論を通して理解することを助けることであったり、イートン校でのラグビーが海戦での勝利に結びついたと述べたウェリントン卿の話を題材に、スポーツと戦争の結びつきについて自由に議論させて考えさせたりすることである。すなわち議論が中心である。戦争を支持する、あるいは嫌悪する心理の両側面を扱う『平和教育』ではあるが、その両側面を理解し議論することが授業の中心として提唱されている。したがって、そこには自らの行動を修正していくような行動的な側面が見いだせない。

大西の「闘争の倫理」から観て生ずるノディングズに対するもう一つの疑問は、スポーツの観衆についての言及はあるものの、プレイヤーの心理に関して言及がないことである

(上述のように、訓練や交戦による軍人の仲間意識を賞賛する心理については言及されている)。

これらノディングズの二つの問題点については、大西の「闘争の倫理」によって解決が可能かと思われる。例えばラグビーというスポーツのプレイヤーの、ラグビーを通しての修行ないし行、また科学的探究(求)に観られる理論と行動の一致の道を、生徒たちが歩めるよう教師が助けてはどうだろうか。ノディングズの事例を用いれば、具体的には、生徒達自らが行進することによってシンクロしたときの心理と、例えばある国家の軍事パレードの行進の様子を映像などで見て、自らの行動と軍事パレードに観られる行動の比較考察を行い、生徒それぞれが自らの行いたい行進とはどのようなものか、いったん自由に議論した上で、一つのイメージを共有し、過去の行進の経験を再構成して理論化し、また実践して修正するといったことなどが考えられるだろう。ときには行進から外れたいという誘惑をどう考えるか。近年のオリンピックに観られるような行進をしたいと考えるなら、その誘惑はコントロールされるべきものにはならないだろう。一方で一糸乱れぬ行進が目指されるような、競技的な要素をもって行進するのであれば、その誘惑はコントロールされるべきかもしれない。こうした行進そのものに対する理論の自由な議論と実験(練習)の繰り返しにより、オリンピックに観られるような自由度の高い行進とも、軍事パレードのような国威発揚を求める行進とも異なる、生徒たち自らの求める行進の理論が構築され、実践されるという理論と行動の一致につながるかもしれない。デュエイ理論に従っていえば、次の真理を求めるいろいろな人間が行進という行動を協力して行うとき、そこには先に「こうすべき」行進の理論はなく、行っていったん完成したに見えても、次の「行進」の理論が探究(求)されるといえよう。

おわりに

本稿では、平和構築や平和学習への体育・スポーツの貢献のあり方を探る手がかりとして次のことを明らかにした。第一に、ノディングズは『平和教育』において戦争を支持する心理を理解し、生徒たちに議論させる機会を授業で設けるよう提案している。第二に、大西の「闘争の倫理」からは次のことが明らかになった。汚いプレイでも勝ちたいという誘惑からくる情緒的行動は「闘争の倫理」によって克服されねばならない。その際、勝ちたいという衝動からくる、社会的習性に認められる行動は、習性の変容をもたらし、技術性の向上を促す原動力をもつものであり、コントロールされるべきものではない。第三に、大西の「闘争の倫理」を観点としてノディングズの『平和教育』を検討し、後者には観戦者の視点はとりあげられているものの、プレイヤーとしての自らの行動を修正していくという、いわば当事者の視点が無いことを指摘した。

以上から少なくとも、平和教育(学習)では、戦争を支持・嫌悪する二つの心理につい

て議論し理解するというノディングズの方法だけではなく、大西によって提示されたように、あるスポーツを通して、プレイヤーが自らのプレイをよりフェアなものに修正し、さらに技術性の高いプレイを探究することは、対等を保障されたスポーツという非現実的な世界において平和を希求する行動を習性とし、それを現実の世界にも応用させるという期待をもてるものであるといえよう。その際、スポーツのあるチームや国家に対する狂信・熱狂について、子どもたちは、自らの行動を探究（求）ないし修行の対象とすることもありえよう。だとすれば、子ども一人ひとりが次世代の平和構築の主体として、平和とは何か、平和をどのように実現するか、他者が経験を語るのを聴くだけにとどまらず、自らが探究（求）すると同時に修行するという方法があるということが言えよう。したがって、少なくともスポーツは平和教育（学習）、さらに平和構築の次世代の主体者育成について、有意義を持たないわけではないと結論づけられる。

今後の課題としては、大西のデューイ理解を、デューイが知識と行動の関係について論じた『確実性の探究』と、知識を習得する過程としての教育における思考作用の構造を示した『思考の方法』と照らし合わせることで、さらに非現実的なスポーツの世界から現実の世界への応用の際に浮上する問題を検討することがあげられる。

注

- 1 クーベルタンについては、公益財団法人日本オリンピック委員会の HP「クーベルタンとオリンピズム」を参照（URL: <http://www.joc.or.jp/olympism/coubertin/>, 2016 年 11 月 29 日閲覧）。また映像によるオリンピックやパラリンピックの教育のなかで、映像のもつプロパガンダについては次を参照のこと。舛本直文（2015）「映像を用いたオリンピック・パラリンピック教育」『大学体育 106 号（42 巻 2 号）』pp.20-26。また師岡文男（2015）オリンピック・パラリンピックに関する教養教育を提唱し、来田享子（2015）も民主主義の観点からオリンピック・ムーブメントについて言及している。真田久・舛本直文・師岡文男（以上パネリスト）、来田享子・重城哲（司会）「日本体育学会・全国大学体育連合 共催シンポジウム『東京オリンピック・パラリンピックと大学連携』」『大学体育 106 号（42 巻 2 号）』pp.38-53。
- 2 デューイが日本の戦後教育に与えた影響については、杉浦宏（1998）参照。
- 3 大西のデューイ理解の一助となるのが、藤島（2001）である。藤島は、『闘争の倫理』の共著者である伴の発言から大西による早稲田大学ラグビー部等での練習がデューイ理論における科学的方法論にかなうものと見なしている。
- 4 須賀，2012，pp.84-85 参照。
- 5 ただし、ラグビー等でよく用いられる“All for one, one for all”について、興味深いことに大西は異議を唱えている。

オール・フォー・ワン，ワン・フォー・オールという行き方では出来ないと思うんです。僕の考え方は、その中で卓越性のあるやつをだれか作らなければ、そのチームは決して勝てない。

闘争の倫理をアピールする場合に技術の面でどうして卓越した者が必要かという点、力のある者はどうしても力でプレイを行っていくんです。力で屈服させていくものですから、アンフェアではないんだ

けれども、アンフェアに見える、あるいはアンフェアになる可能性があるんです。したがって、それを技術でサーッと行く者が中心となって、フェアのプレイを見せる、そこに闘争の倫理が見えてくるのです。(中略)

オール・フォー・ワンの場合には、そうした卓越性を持っている者がチームの中に入ってくると、どうしてもチームワークが難しくなるんです。(中略) それをみんなが雅量で認めてやるようなチームでないとトップには行けないと思うんです。(大西ほか, 1987, p.335)

この背景には2(2)で述べたデューイの民主主義に対する大西の理解があったと推測される。

6 大西ほか, 1987, pp.199-201。

7 これについては植田(1949)を参照。

ひとつの観念は、いわば現実性の窓をとおして、かぎりなく豊饒な可能性の沃野を我々の前に展開する。我々は行動によって、この可能性の世界を踏破することができる。観念は、現実的側面から仮説としての可能的側面を暗示するが故に、我々を誘導して限りなく進歩させることが出来るのである。(p.28)

大西のいう具体的戦法の開発の過程は、こうした植田によるデューイの観念論理解が背景にあったと推測される。

8 大西ほか, 1987, pp.31-32。

9 大西, 1984, p.3 参照。

10 大西, 1988, pp.120-123 参照。

11 大西, 1984, p.3 参照。

12 大西ほか, 1987, pp. 158-159 参照。

13 大西, 1988, pp. 120-123 参照。

14 大西ほか, 1987, p.202 参照。

15 人間はどんな人間も各自生活のタイプを自由に持っている、その生活のタイプがみんな違うから、それによってその人達の考え方が違って来る。生活のタイプが違うから人それぞれの認識の違いが起こる。(中略) ものの見かた、認識が違って来る。それはつまり評価が違うということで、評価が違えば、価値観が変わってくる。したがっていろいろな人が世の中には出てくる。(中略) それがみんな一緒になって或るものを選択して、いい社会を作り上げていこうとする。そういうことを考えていく一つの方法が創造的な行動の考え方なんです。

それをスポーツのほうからいえば、戦法理論に基づいた技術研究をやって、それを練習し、それを反省し、吟味し、連続的に改造をして、勝利に導く。そういう創造的な行動の行き方と同じだ。こういうふうに考えるわけです。(大西ほか, 1987, p.205)

16 一番大切なことは、子供のときにゲームをやらせて、そのゲームのなかで徹底的に闘争の倫理の教育をしていくということではないかと思います。日本のスポーツや体育などの指導の仕方というのは、子供のときにはゲームをなるべくやらせないで、ある程度都市を取ってからやらせる。そのためにそこで徹底した教育ができない。

ゲームでは、アンフェアなプレイとフェアなプレイのどちらを選ぶかという選択をプレイヤーはいつも強いられるわけです。そのときに、アンフェアなプレイをおさえてフェアなプレイを行ってその喜びがわかるのはぼくは十五歳ぐらいまでだと思う。本当に身に沁みて、おれはきれいにやったんだという純粋な気持ちがわかるのは十歳位までです。その年齢の内に徹底的にゲームをやらせることがどうしても必要です。

それ以上になると、逆に裏をかいてやったというような気分が起ってきて純粋なフェアなプレイを喜ぶという気持ちが無くなってしまふ。そういうようになってからフェアにやれと言っても無理です。

ですから、その前にもっとゲームをやらせて、そのゲームのなかでいまの行動はいけない、いまのルールでは許されるかも知れないけれども、本当はいけない、そういうことをはっきり教える。その点、パブリック・スクールでは入学した一年生か二年生の頃、十二、三歳でしょうか、それを徹底的に教えています。それをほめたり、怒ったり、いろいろやっている。(大西ほか, 1987, pp.307-308)

- 17 ルール以前に何でこのルールができたかというふうな状況がいろいろありますね。(中略) ルールというものがあって、それに従うものではない。そのゲームをよくしていくためにルールを作っていくんだ。そういうことを教えていくのがぼくはやはり一つの教育だと思います。(大西ほか, 1987, p.309)

《文献》

- 植田清次 (1949) 『プラグマティズム——行動の哲学——』 白揚社。
- 大西鐵之祐 (1984) 『わがラグビー挑戦の半世紀』 ベースボール・マガジン社。
- 大西鐵之祐・伴一憲・大竹正次・榮隆男 (1987), 『闘争の倫理 スポーツの本源を問う』 二玄社。
- 大西鐵之祐 (1988) 『ラグビー 荒ぶる魂』 岩波書店。
- 神野周太郎・大橋道雄 (2014), 「体育学における学校体育の本質の一端に関する検討：デュイの教育学を中心として」, 『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系 66』 pp.33-43。
- 神野周太郎・阿部悟郎 (2015a), 「体育の本質論におけるプラグマティズムの可能性に関する研究～デュイの教育学に基づいて～」, 『仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集 16』 pp.75-85。
- 神野周太郎 (2015b), 「体育学における成長概念の検討ーデュイの教育学を中心としてー」, 『体育・スポーツ哲学研究 37-1』 pp.29-44。
- 須賀由紀子 (2012) 「生涯スポーツと体育科教育～保育・初等教員養成への視点～」『実践女子大学生活科学部紀要第 49 号』 pp.81-93。
- 杉浦宏 (編) 『日本の戦後教育とデュイ』 晃洋書房 (1998)。
- 高橋徹 (2011a), 「経験としてのスポーツ」に関する研究：デュイ経験概念の再評価から, 『体育学研究 56』 pp.297-311。
- 高橋徹 (2011b), 「スポーツの経験的価値についての検討——プラグマティズム思想における経験概念の論議から——」, 『体育・スポーツ哲学研究 33 (2)』 pp.91-105。
- 高橋徹 (2015), アートとしてのスポーツに関する研究ーJ.デュイの教育理論に着目してー, 『日本体育学会大会予稿集 66』, p.86。
- ノディングズ・ネル (著), 佐藤学 (監訳) (2007) 『学校におけるケアの挑戦 もう一つの教育を求めて』 ゆみ出版。原著は Noddings, Nel (1992), *The Challenge to Care in Schools: An Alternative Approach to Education*, Teachers College Press.
- 藤島大 (2001), 『血と熱 日本ラグビーの変革者・大西鐵之祐』, 文藝春秋。
- 森田啓之 (2010), デュイの視界, 『日本体育学会大会予稿集 61』 p.26。
- Noddings, Nel (2006), *Critical Lessons: What Our Schools Should Teach*, Cambridge University Press.
- (2012), *Peace Education: How we come to love and hate war*, Cambridge University Press.邦訳は筆者による。

Nussbaum, Martha C. (1996) *For love of Country?* Ed. Joshua Cohen., Beacon Press.

(人間生活科学部教授・教育学)